様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０６４３
研究課題名（和文）：
１７世紀イングランドにおける「宗教的寛容」・「不寛容」の思想と実践の研究

研究課題名（英文）：
Ideas and Practices of Religious Toleration and Intolerance in Seventeenth-Century England

研究代表者
那須　敬（NASU KEI）
国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号：40338281

研究成果の概要（和文）：
17 世紀半ばのイングランドにおける、宗教的寛容および不寛容をめぐる政治的・神学的・思想的な交渉過程を考察した。不寛容な前近代から寛容な近代へと直線的に発展する歴史像を提示し続けてきた「ピューリタン革命」理解をこえて、近世社会における宗教対立を理解する新しい枠組みを模索した。議会と教会、イングランドとスコットランド、書簡・請願と説教・印刷メディアなど、複雑な交渉過程の中で、「寛容」「非寛容」の概念がそれぞれを規定しながら動的に構築・再構築されるプロセスが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this research project was to examine the complex processes in which political, theological and intellectual negotiations about religious toleration and/or intolerance evolved in mid-seventeenth century England. The emphasis was on revising the conventional historiography of “Puritan revolution” which had pictured a progressive development of modern tolerationist ideas as opposed to intolerant pre-modern sociability. The study has revealed that both the idea of “toleration” and its opposition emerged as products of various negotiations, between parliaments and churches of the two kingdoms -- England and Scotland --, or between different channels of communication such as correspondence, petitions, sermons and pamphlets.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：近世史　宗教史　イギリス　寛容

１．研究開始当初の背景

文化摩擦、人種差別、宗教対立といった様々な対立と緊張の諸相は、「戦争の世紀」であった 20 世紀よりも、21 世紀に入ってますます前景化しているように見受けられる。本研究は、こうした状況に対して対処療法的、一時的な解決方法を求めるのではなく、諸対立の背景にある複雑な歴史的経緯を認め、長期的な視野のもとで問題をとらえる見地を確立しようという、近年の歴史学的関心に呼応するかたちで構想された。

西洋における「宗教的寛容」の歴史は、文明の成熟度を示す指針として 19 世紀から研究されてきた古典的なテーマであるが、西洋世界の卓越性を前提としつつ、「不寛容」な前近代から「寛容」な近代へ前進するものとして歴史を説明しようとする楽観的な発達史観は、もはや通用しない。「寛容」と同時に「不寛容」のメカニズムを歴史の中でとらえなおす必要がある。

２．研究の目的

本研究は、イングランドにおいて「宗教的寛容」をめぐる政治的・宗教的な議論がもちあがった 1640 年代から 1650 年代を中心として、「寛容」と「不寛容」をできるだけ具体的に、また多角的に把握することを目的とする。とくに、宗教問題を政治的論争の過程の中でとらえる政治史研究または「三王国戦争」研究のレベルと、ジョン・ミルトンなどの思想家のテクストを分析する思想史のレベルという、異なる研究領域観のつながりを意識しながら、総合的な理解を目指す。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、三年間の研究をいくつかのサブ・トピックに分けて作業を進めた。大まかに分けて、

(1) 理論構築。17 世紀イングランド史における宗教の問題、とくに「ピューリタン」理解の再検討と、これに関連する「寛容」「不寛容」概念をめぐる研究史を整理し、問題点を検証するとともに、新しい枠組みの構築を試みた。

(2) 内戦・革命期の宗教問題の政治史的な整理。イングランド議会、ウェストミンスタ神学者会議、スコットランド議会およびスコットランド教会、ロンドン市議会、ロンドンの長老派聖職者ネットワーク、出版・言論界といったさまざまな立場の間での「寛容」「不寛容」をめぐる交渉の過程を、一次史料の徹底的な調査を通して再構築した。

(3) 内戦期の「寛容」「不寛容」論争の、その後のイングランドの宗教文化への影響を考察した。とくに、共和政時代のイングランド長老派の動向について、1651 年に処刑された長老派牧師クリストファー・ラヴを中心に調査した。

(2), (3)については、一次史料の調査・分析が研究の中心となった。このうち、Early English Books Online 等のデジタル史料データベースで収集可能なものについてはできるだけデータベースを活用し、それ以外のものについてはイギリス各地の図書館・文書館で調査を行った。特に、2007 年度と 2008 年度には、研究代表者の所属機関（国際基督教大学）における特別研究期間制度を利用して、イギリスにおける長期的な史料調査を実施することができた。2009 年度にも現地調査を行い、3 年間をかけて充分な調査時間を確保することができた。

イギリスでの調査は、主に以下の機関で行った。National Archives, British Library、Parliamentary Archives、Institute of Historical Research、Royal Society Library、Dr Williams Library、Wellcome Library（以上ロンドン）、Bodleian Library（オクスフォード）、National Archives of Scotland（エジンバラ）、Lincolnshire Archives（リンカーン）。その他、イギリス各地の図書館・文書館から史料のデジタル・イメージの取り寄せも行った。

イギリスでは、ロンドン大学ジャスティン・チャンピオン教授、ブレア・ウォーデン教授、ヨーク大学マーク・ジェナー教授らとの研究討議の機会を得て、有益な意見交換を行うことができた。

日本においては、国際基督教大学図書館に所蔵されている刊行史料のほか、Early English Books Online 等のデータベースを活用して、研究を続行した。また、国内のイギリス史研究者を招いての研究セミナー、ワークショップも定期的に行った。

４．研究成果

サブ・トピックの(1)については、(2)の調査結果を利用しながら、論文および学会発表の形で成果を公表することができた。まず、近世イングランド史研究における「ピューリタン」理解の問題を、歴史学研究の実践における言語論的転回に照らして論じた論文（雑誌論文②）で、宗教的アイデンティティが言語使用に大きく依存するしくみを明らかにした。さらに、異宗派の受容と排除についてのシンポジウムに参加し、「寛容」「非寛容」を、思想の新・旧という対立軸にあてはめ普遍化して理解することの問題点を指摘した（雑誌論文①、学会発表③)。

サブ・トピック(2)についてはまず、特定の歴史的状況における、異なる宗教的アイデンティティの間での交渉を通して「寛容」「非寛容」の概念がそれぞれ、動的に構築・再構築されていくプロセスに注目する必要性を確認した。このことは、ジョン・ミルトンによる長老派批判と、1640 年代のイングランド・スコットランド間の宗教外交の分析から（学会発表①)、また国教会聖職者イフライム・パジットによる 1630 年代から 40 年代にかけての、諸教会および異端のカタログの分析から（図書①)、具体的に検討した。

イギリス各地の文書館での長期的な史料調査によって得られた、もっとも重要な発見の一つは、内戦期におけるイングランド議会、ウェストミンスタ神学者会議、スコットランド議会、スコットランド教会のあいだで、宗教政策をめぐる非常に緊密かつ複雑なコミュニケーションが存在したこと、またその中で「寛容」「非寛容」問題が、交渉の主題としてだけでなく、交渉を維持するための手段または共通言語として用いられていたことである（学会発表④)。中でも Bodleian Library における書簡や請願書類の調査は非常に有益であり、「寛容」をめぐる政治的・神学的対立の構造にこれまで以上に迫ることができた。この問題については、今後さらに調査を重ねて議論を明確にしたい。

サブ・トピック(3)については、クリストファー・ラヴについての史料調査の過程で、これがより大きな問題の枠組み、すなわち 17 世紀公共圏における信仰と政治秩序の関係をめぐる問題に接続することが分かった。ラヴの処刑は、「寛容」「非寛容」をめぐる長老派ピューリタンの、1640 年代からの運動の延長線上に位置付けることができるが、同時に共和政から王政復古期にかけてのイングランド社会における心性のあり方の問題にも関わっていると見ることができる（学会発表②)。この点は、次の研究課題として継続的に取り組む計画である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①. 那須敬、「コメント：公開シンポジウム「信仰における他者：異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論」、第 106 回史学会大会報告」、『史学雑誌』、第 118 編、第 1 号（2009 年 、113 頁（査読有）.

②. 那須敬「言語論的転回と近世イングランド・ピューリタン史研究」『史学雑誌』第 117 編、第 7 号（2009 年 、83-96 頁（査読有）.

〔学会発表〕（計５件）

①. 那須敬「「長老派」批判とMilton」、日本ミルトン協会第二回大会シンポジウム、2009 年 10 月 17 日、日本大学文理学部

②. 那須敬「ある長老派牧師の殉教と予言：クリストファー・ラヴの処刑（1651 年）をめぐって」、イギリス革命史研究会、2008 年 12 月 6 日、明治学院大学

③. 那須敬「コメント」、公開シンポジウム「信仰における他者：異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論」、第 106 回史学会大会、2008 年 11 月 8 日、東京大学

④. Kei Nasu, ‘Cataloguing sins, heresies and religions: the making and remaking of heresiography in seventeenth-century England’, History Department Seminar, Royal Holloway University of London, England. 2008 年 1 月 15 日

⑤. 那須敬「17 世紀の宗教・政治・音楽批判」、日本音楽学会関東支部・イギリス史研究会共催シンポジウム「宗教改革期イングランドの知られざる音楽事情 － 荒廃か新生か － 」明治大学、2007 年 6 月 23 日

〔図書〕（計２件）

①. 深沢克己（編）『ユーラシア諸宗教の関係史論（仮)』(那須敬、第 10 章「「クリスチャン」と「異端」のあいだ：十七世紀イングランド教会とイフライム・パジット」を担当)、(勉誠出版、2010 年出版予定)

②. 井野瀬久美惠（編）『イギリス文化史』

（那須敬、第１章「宗教と文化」を担当）、
（昭和堂、2010 年出版予定）

６．研究組織
(1)研究代表者
那須　敬（NASU KEI）
国際基督教大学・教養学部・上級准教授
研究者番号：40338281

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし